

令和 8年 3月31日

大東市長 様

7 年度提案公募型委託事業に関する報告書

団体名：PCP センター

事業名：ACP×終末期リハビリテーションフォーラム

1. 実施内容
2. 事業の報告（イベント等の写真を付けてください）

1. 実施内容

[illegible]

2. 事業の報告

計画した事業

『いのち』についての話をしよう

～ACP そして緩和ケアと人生の最終章フォーラム～

登壇者、スタッフと相談し、イベントの名称を変更しました。

(A) 有識者、実務者によるパネルトーク

【パネラー】

高濱裕也 氏（慶生会/認定理学療法士）

田中こずえ 氏（野崎徳洲会病院 薬局 副薬局長 / 緩和ケアチーム）

神田栄美子 氏（藍野大学 医療保健学部 看護学科 教員 / 看護師）

樋田小百合 氏（四條畷学園大学 看護学部 看護学科 老年看護学 教授）

終末期医療、特に「緩和ケア」について、どういうものかをご説明いただき、在宅、急性期病院、緩和ケア病棟、高齢者施設等場所によって異なる考え方や実施内容をお話しいただき、緩和ケアを望む場合どのようにすれば良いのか、誰に相談すれば良いのか等患者が意識しておくこと等を事例を交えて一人20分ずつお話しいただきました。

(B) パネラー全員によるディスカッション、来場者との質疑応答

パネラー4名にご登壇いただき、ACPについて、まだ決めかねている場合、もう決めている場合、家族との意見が異なる場合など、実際の現場での対応等をお話しいただいた後、来場者からの質問にお応えいただきました。

(C) 大切な「いのち」を感じる BOOK ギャラリー

考えることが難しい「いのち」というテーマについて、専門書や闘病記ではなく、物語で優しく伝えてくれる小説や絵本を同会場後方に展示、紹介いたしました。

【選書監修】

小辻昌平 氏（直木三十五記念館 事務局長）

計画時の期待する効果

1 知る機会

ACP や、終末期医療の在り方について気軽に知ることができる機会になる。

2 自分事として考える

100%必ずやってくるのが「死」であり、突然死でない限り「終末期」という段階がありますが、死ぬための準備ではなく、最期まで如何にしてより良い人生を送るかという希望ある未来の計画という視点を持ち、実践へのきっかけにさせていただく。

3 具体的行動への波及により本人の幸福のみならず医療者の負担を軽減する

市民が自分事として終末期医療について考え ACP を実践することで、本人の幸福を増幅させるばかりでなく医療負担を軽減し、その結果医療費を削減し、医療の働き方改革による医療機関の動向にもマッチする。

4 切れ目なく安心できるまち大東

死ぬ直前まで元気である、いわゆるピンピンコロリの割合は 5%と言われます。95%の人は何かしら疾患や障害と共に生き、介護を必要とする期間があります。そうした要介護状態以降の「安心」を市民にお伝えすることで「大東市は高齢者を見捨てない、安心できる良いまち」だと認識される。

5 教育への貢献

大学教員と共に質的研究を行い、未来の地域の担い手である学生の教育に役立てる。

6 大東市の付加価値の醸成

市民の意識が向上することにより「幸せデザイン大東」にある「年齢に関わらず健康で自分らしく暮らせるまちづくりの推進」として大東市の付加価値となる。

結 果

* 一般参加者 66 名

過去行ってきた終末期医療イベントの、今回は 6 回目となります。(大東市提案公募型委託事業としては 2 回目) 何れも目的は終末期医療について知ること、考えることといった市民意識の向上ですが、近年開催したイベントは集客力を意識して映像コンテンツや楽器演奏等と抱き合わせで開催しておりました。今回は、そうした余興を取り払い、真剣に話を聞きたいという人を対象とし、また来場者と対話する時間も重視して「専門家の話」と「市民の生の声」を主軸にして組み立てました。

提案公募に採択されたこともあり、市長にもご興味いただける機会と考えておりましたが、お越しいただけなかったのが残念です。

一般参加人数が、2 年前の 250 名、一昨年夏の 150 名、昨年の 100 名から更に減少したことについて、多くの市民の行動は促せなかったわけですが、来場された方は長時間にわたるお話を最後まで真剣に聞いておられ、またアンケートからも本当に真面目に考えてらっしゃる方ばかりだったことが伺え、数字以上により良い会になったと感じております。

* 登壇者

過去のイベントでお世話になっている慶生会の高濱さん、藍野大学の神田先生に加え、四條畷学園大学の樋田先生、野崎徳洲会病院の田中さんと出会い、一緒にイベントを作っていくことができました。皆さんそれぞれの現場で想いを持ってご活躍されておられ、企画に共感いただき、何度もミーティングを重ね、全体として市民に伝わる良いものが出来ました。

イベント終了後も、皆さん良い会だったと笑顔でおっしゃっていただきました。

* スタッフ

こうした活動をしていると、想いのある人がどんどん集まってきます。単なるスタッフではなく、それぞれが触発されて自主的に行動し、また新たな活動に派生していきます。モチベーションを高め合える素晴らしいスタッフに恵まれ、とても良い会となりました。

* 研究活動

今回は四條畷学園大学の樋田先生が一般市民への意識調査研究を兼ねてアンケートを作成されました。大東市の大学の研究に役立てられ、未来を担う学生

の学びに寄与できたことを嬉しく思います。
(アンケート結果は別途添付します)

(A) パネルトーク



朝から雨の降る寒い日でしたが、過去に増して高齢者の割合が多かったように感じます。一人 20 分×4 人、休憩なしのプログラムでしたが、皆さん真剣な眼差しでお話を聞かれていました。

(B) ディスカッションと質疑応答



全体で 2 時間半という長丁場でしたが、ほとんどの方が最後まで真剣に聞いておられました。質疑応答の 30 分は、次から次へと手が上がり、ご自身の心配事を相談され、また他の方の質問も我が事のように聞いておられました。

(C) 「いのち」を感じる BOOK ギャラリー



本離れと言われる昨今ですが、多くの方が展示された本を手にとってご覧になられていました。映画や YouTube といった比較的速度の速いコンテンツより、読書速度で心に染みる物語を感じられる方も、まだまだ沢山おられるようです。



書家の吉田柏蓮さんに書を書いていただきました。
物語で言えば、終末期は最終章。
どう終わるかで人生の彩りが左右するとも言えます。

医療の発達により、非情にも最期まで尊厳を保つことが困難になってしまった現代社会。
権利として得られたはずの「いのちの選択」が「究極の選択」を強いられるようになってしまった。
そうした社会であっても最期までより良く生きるために必要なことは
「知ること」「考えること」「話し合うこと」

「いのちの選択」は、突然やってきます。
大切な人と自分のために、選択できる自分になる。

大きなイベントはこれで最後ですが、今後は別の形で伝えていきたいと思います。
ありがとうございました。